

## 「赦し、信仰、奉仕」（ルカによる福音書一七章一〜一〇節）

### 1 イエスの言葉

今日の説教題は聖書の見出しをそのままいただいたものです。今日の箇所を読むためにも、また少し一般的に、キリスト者の在り方全体を考える上でも、一つの手引きとなる表題です。

このところルカの学びはイエスの譬えによる教えが続いています。今日の箇所にも譬えが出てきますが（七節以下）、大きなものではありません。この間私ども、それぞれの箇所について、譬えであれ、そうでないものであれ、それがだれに対して語られたものか気にしながら読んできました。それでいうと今日の箇所は「弟子たち」（一節）に語られたものです。

何章か前まで遡って見ると、一番多いのは、ファリサイ派の人びとや律法学者らに対して語られた言葉です。次に多いのは弟子たちに対する言葉です。不特定多数の群衆に語られたものもあります。相手はだれか、ルカはいつもそれをはっきりさせています。

しかし、考えてみれば、例えばファリサイ派や律法学者に語られたとき弟子たちがそこにいなかったわけではありません。弟子たちにイエスが語ったとき、周りに、ファリサイ派や律法学者らがいなかったわけでもありません。つまりお互いに聞いていた、みんなが聞いていたのです。

その例として、先週の箇所をもう一度取り上げて恐縮ですが、一六章一四節に、ファリサイ派の人々が、「この一部始終を聞いて」、イエスをあざ笑ったというところがありました。

ここに「この一部始終を聞いて」とありますが、弟子たちに語られたことを聞いてということとです。神と富に兼ね仕えることはできないと弟子たちにイエスが語ったのをファリサイ派の人々が漏れ聞いて、あざ笑ったのです。

ということはどういふことでしょうか。ここからここまではファリサイ派や律法学者用、ここからここまでは弟子たちのための言葉、そんなふうに分けることはできないということとです。

もちろんイエスの弟子たちは、イエスがまさに自分たちのために語ってくださいった言葉、教え、戒め、それに聞かなければなりません。しかしそれだけではない。ファリサイ派や律法学者を相手に語られた厳しい批判的な言葉、それはもう聞かなくていい、聞く必要がない、われわれには当てはまらない、当てはまるのは彼らだけだと考えてはならないということです。

それゆえイエスも今日の箇所でこう言うのです。

あなたがたも気をつけなさい（三節前半）。

イエスの弟子たち、そして私ども、イエスの今日における弟子として歩んでいる私ども、ファリサイ派や律法学者の生き方とは無関係、そんな考え方・生き方をするこ

とはないと考えています。本当にそうなのでしょいか。本当に、彼らの在り方を克服しているのでしょうか。私ども、主イエスのみ言葉に聞きながら、いわゆるフアリサイ主義、あるいは律法主義（律法を文字通り守ることで救われようとし、守れない人をさばき、排除する）に陥らないともかぎらないことは、自覚してよいことだと思います。

改めて思います。聞き手が変わる中で、しかしイエスの言葉は変わらずにそこにあります。それに私どもどのように聞き、どのように従っていくのか、フアリサイ派であれ、律法学者であれ、弟子たちであれ、あるいはその他の人々であれ、つねに問われているのはそのことです。

## 2 赦し

今日の箇所の手紙は、他の福音書では、場合によっては、色々な箇所にも、ばらばらに伝えられています（マタイ一八・六〜七、二一〜二二。マルコ九・四二）。

ルカはここに集めてイエスの弟子のための言葉としてまとめています。「赦し、信仰、奉仕」、これら三つの言葉は、イエスの弟子としての歩みの輪郭をも示しているものです。

はじめに「赦し」に関わる部分、一〜四節です。「赦し」に係するのは、とくに三〜四節です。その前に一〜二節を取り上げます。

つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である。そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせより、首にひき臼をかけられて海に投げ込まれてしまう方がましである（一〜二節）。

ここには二つのことが戒められています。一つは、「つまずき」をもたらす者は禍だということ、もう一つは、一人の小さい者を、徹底して大切にしないということです。

「つまずき」という言葉は、一般には、障害物、邪魔になるものという意味でしょうけれど、むしろ罠（わな）、誘惑するものことです。もとの言葉は、鳥をおびき寄せる餌、それをつける棒のことのようです。

そういう罠となって、人を罪へと誘うもの、それはこの世のどこにでもあるものだと思います。

その一つは富、お金です。お金の罠にはまり、罪への誘惑に陥った例が、前章、一六章でイエスの譬えの中に出てきた「お金持ち」ではないでしょうか。富、お金自身が悪いわけはありません。彼はしかし、その誘惑には勝てず、生前、玄関先のラザロすら目に入らなかつたほど、愛と同情心を失い、神を愛し隣人を愛する戒めに反し滅びの道を辿ったのです。

もう一つ、小さい者、たった一人でも、これを大切にすることが、ここで言われています。

前々章、一五章の有名な「見失われた一匹の羊」の譬えを思い出しただきたいと思います。

詳しく申し上げる必要はないと思いますが、群れを迷い出た一匹の羊、九十九匹を安全なところに置いて捜しに行くどころか「野原に残して」、つまり危険にさらして一匹を捜しに行ったのです。九十九匹がどうなってもいいということではなくて、九十九匹全部とくらべられるほど、一匹を大切したのです。それが神だと、イエスは証しています。イエスの弟子たち、すなわち、私どもも、それと同じくあるほかないはずだとイエスは言うのです。

さて本来の「赦し」に関わる三〜四節です。

もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、「悔い改めます」と言っておなすところに来るなら、赦してやりなさい（三〜四節）。

これは、明らかに、あの「放蕩息子の譬え」の兄との関係で、イエスが語っていることです。

あそこを取り上げたとき、あの兄は、ファリサイ派、律法学者らを指していると申し上げました。兄に具体化されているファリサイ派は、父に受け入れられ、悔い改めた弟を赦さなかったのです。まさに、あなたがた、わたしに従う者はそうであってはならないのです。

兄にとって、弟は、まったく自分勝手に生きてきて、そんな弟を赦す父が許せなかったのです。

しかし父は弟を赦しています。また父は、父と一緒にいた兄の存在とその生活を受け入れています。この父の赦しを兄は受け入れ、したがって弟をも赦し、受け入れるべきなのです。

### 3 信仰と奉仕

ここまでイエスは、罪の誘惑に陥ってはならない、神が一人を大切にしているように大切にせよ、そしてあなたが神から受け入れられているように、「あなたに対して罪を犯しても」赦しなさいと語っています。これは、むしろイエスを信じ、従う者たちに語っているのです。

こうした歩みを、もし私どもがなしうるとすれば、あるいは志すことができるのであれば、それはただ信仰によるほかありません。私どもその真ん中に信仰がなければならぬのです。

使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、主は言われた。「もしあなたがたからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう」（五〜六節）。

信仰を「増して」ください、は、また「強くして」（ルター）くださいとも、「与えて」くださいとも訳すことができます。

信仰は、神の賜物です。はじめから私どもの中にあるものではありません。神によ

ってつくり出されるものです。

信仰は、自分の外にあるものによって、すなわち、信じるその対象によって、生かされ、生き、人生が方向づけられることです。人生の中心を、自分の外に（神に）もつことです。したがって信仰は、信頼です（マルコ九・二四）。

福音書に明らかにされている信仰は、イエスへの信頼です。イエスにおいて働いている神の力に、救いの奇跡を疑わず依り頼むことです。人間的に不可能と見えても神にすべてを委ねることを意味します。福音書も、使徒パウロも、山をも動かす信仰について語り（マルコ一・二二以下、コリント一、一一・二）、ここでも、強く根を張る桑の木に、自らの根っこを引っこ抜き、海に根を下ろせと言っても実現すること疑わないことだということです。

さてその信仰から発して、イエスは、弟子たちに、もう一つのことを、奉仕について語っています。一つの譬えが用いられています。

あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰ってきたとき、「すぐ来て食事の席に着きなさい」と言う者がいるだろうか。むしろ「夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、私が食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい」と言うのではないだろうか。命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか」（七〜九節）。

ここまでが譬えです。当時のユダヤ社会、典型的な中規模の農家の主人と奴隷が取り上げられています。譬えの意味はこうです。

あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです」と言いなさい（一〇節）。

神は主であり人間は僕です。いかにも封建的な関係の理解と思われるかも知れませんが。おそらくそうではなくて、心からの畏敬と感謝、それが、私どもをして、主の僕と自覚させるのです（ローマ一・一）。

さて今日の箇所、ここまで読み進めてきたように、イエスがイエスと共にエルサレムに上る弟子たちに、その在り方を、これまでの教えをまとめながら、教えてくださったところからです。

最後に確認したいのは、私ども神を信じイエスに従う者たちの中心に信仰がなければならぬということです。今日の聖書箇所も信仰を中心に置いていることは明らかです。

その上で私ども神に仕え、教会に仕え、隣人に仕えます。それは自己満足のためではありません。見返りを求めてするでもありません。神の栄光のために、ふつつかな僕としてなすのです。

「赦し、信仰、奉仕」、むしろそのほかにも、私どもの在り方を示す言葉は多くあります。しかし今日のこの三つの言葉も、私どもの信仰の歩みの一つの手引きとなる言葉であることは確かです。

（二二年五月二二日）